

## ローマ3章10-12節 「義人なし、一人だになし」

### 1A 罪の下にいる人間

#### 2A 墮落

##### 1B 霊の乞食状態

###### 1C 神を見た人々

###### 2C 神のみが良い方

##### 2B 律法にある墮落

###### 1C 義の行い

###### 2C 霊的な悟り

###### 3C 求めない選択

###### 4C 反抗

###### 5C 無価値

### 本文

ローマ人への手紙 3 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びはローマ 2 章まで来ました  
が、今日の午後礼拝で 3 章の前半を一節ずつ見ていきます。今朝は、10-12 節に注目します。「<sup>10</sup>  
次のように書いてあるとおりです。「義人はいない。一人もない。<sup>11</sup> 悟る者はいない。神を求め  
る者はいない。<sup>12</sup> すべての者が離れて行き、だれもかれも無用の者となった。善を行う者はいな  
い。だれ一人いない。」

私が信仰を持って間もない時、文語体で 9 節の聖句を目にして、あまりにも強烈で、戦慄が走っ  
たのを覚えています。「義人なし、一人だになし。」です。三浦綾子さんの小説「塩狩峠」に引用さ  
れていました。ちょっと待って！そんなこと言ったって、善人は世に数多くいるではないか？と思  
いました。インドのガンジーとか、マザーテレサとか、どうすんの？義人じゃないの？と思いま  
した。ここではっきりと分かりました。神が「義」であるとか話している時に、私たちが正しいとか、間違っ  
ているとかいう判断とは次元の違うところを話しているのだな。もっともっと、根源的なことを話して  
いるのだな、ということです。そこに立った、人間に対する見方を持たないといけないと思いました。

### 1A 罪の下にいる人間

パウロは 1 章 18 節、人々が不義によって真理を阻んでいる、不敬虔と不義によって、神の怒り  
が現れるというところから論じていました。神の正しさと聖さの表れている律法、神の掟が与えら  
れているユダヤ人とて、全く同じように不義の中にとまで論じました。それで、9 節で、こう断言し  
ています。「3:9 私たちがすでに指摘したように、ユダヤ人もギリシア人も、すべての人が罪の下に  
あるからです。」罪の下にいる、というのはどういうことか？罪の影響力がすべての人々に行き渡

っている。それから免れている人は一人もない、ということです。ちょうど、日本国にいて、その主権の下にいたら、だれもが一国の首相は、今は菅義偉さんしかいない、というのと似ています。人であるならば、罪の力と支配の下にあるということです。

## 2A 墮落

それで、「**義人なし、一人だになし。**」と続きます。このことばを、キリスト教の神学では「墮落」と言います。でも、意味合いが普段使われている言葉とずいぶん、違います。

### 1B 霊の乞食状態

「墮落」しているというと、もう救いようがないほど道徳的に退廃しているみたいに聞こえますね。例えば、アル中になってもう二度と、立ち上がれない人を見て、ああ墮落してしまったとか。あるいは、死刑判決が出るような極悪人がいて、すべての人がそういった悪を行っているようにみなさないといけないとか。

多くの人に対して心配になるのは、神経症みたいになってしまう時です。教会で、罪がある、罪があると言われるので、どんな小さな罪意識も見逃さずに見つけようとしてしまうこと。これ、あの宗教改革者のルターがやっていたことだそうです。彼がカトリックの修道僧だった時、どんな小さなことでも、罪だということで先輩の司祭のところに行って、告解(懺悔)したそうです。そうしたら司祭のほうから、「姦淫とか、殺人とか、はっきりとわかる罪のために来るなら分かるが、そんな細かいことまで告解しなくてよろしい。」みたいなこと言われたそうです。使徒パウロは、「私は自分で自分をさばくことさえしません。」という大胆なことを言いました。なぜなら、「私をさばく方は主です。」からです( I コリ 4:3,4)。

そうなんです、義人はいない、罪の下にあるとか言っても、その罪というのが、私たちが普段考える次元と異なっているのです。主の義の基準、裁きの基準を示されないかぎり、見えてこない領域だと思います。

### 1C 神を見た人々

墮落しているというのは、「自分自身には、神を喜ばせること善いものが全くない。」という意味です。イエス様が、山上の説教の冒頭で、「**マタ 5:3 心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです。**」と宣言されました。ここの日本語の訳、実にニュアンス、意味合いが出て来ていない訳だと思います。もっと直接的に訳すと、「**霊の乞食は幸いです。**」です。貧しいというと、日本では特に、相対的な貧困を指しますね。だって、生活保護とか最低限の保障があるし、ホームレスの人たちも、結構、尊厳のある生活を野外で暮らしていますよね。ここで言っているのは、いわゆる乞食です。もう何もない状態です。今日、だれからか食べ物をもらわなければ、文字通り生きていけない、餓死してしまう状態です。全くない乞食のことを指しています。そして、「心」と訳さ

れているところは、「霊」です。心だと感情の深い部分を意味しますが、もっとも根源的な部分、神の前における自分のことです。

聖書には、そういった人々がたくさん出てきます。旧約時代には、「主の使い」が出て来ると、「私は神を見てしまった。どうして今、こうやって生きていられるのか？」と嘆いている人々が出てきます。ヤコブが神の御使いと格闘した後で、「私は顔と顔を合わせて神を見たのに、私のいのちは救われた。」と告白しました(創世 32:30)。神に会うことによって、自分がまだできる、自分にはまだ良いところがあるというものが、全くなくなってしまって、拠り所がなくなってしまって、死んでしまうかもしれない、という嘆きです。

預言者イザヤは、自分の国ユダで行われている不義を見て、怒り、激しく神の裁きのことばを語りました。ところが、天の御座、そこに栄光に輝くイエスご自身が座しておられましたが、それを見た時に、「6:5 ああ、私は滅んでしまう。この私は唇の汚れた者で、唇の汚れた民の間に住んでいる。」と言いました。自分が糾弾しているその唇そのものが、彼らと同じように汚れている、と嘆いたのです。自分はどこかで正しい側、神の側にいたと思って預言していました。ところが、イエス様の座している御座の幻を見て、全くそうではなく、自分も、他の民と同じように汚れていると悟りました。

その他、ダニエルという預言者がいましたが、彼はバビロンとその後のメディア・ペルシアの国でそれぞれ王に仕えていましたが、主の使いが現れて、その栄光を見た時に、「内からは力が抜け、顔の輝きも一変して、力も保てなかった。」とあります(10:8)。ダニエルは、政敵がいて、彼らがどんなにダニエルに非難できる場所を探しても、何一つ見つからなかったという人なのです！そして、使徒ヨハネは、イエス様の栄光の御姿をダニエルと同じようなお姿を見て、「死んだ者のように、その足もとに倒れ込んだ。」と証言しています(黙示 1:17)。自分には全く神を喜ばずような、良いものがないのです。

## 2C 神のみが良い方

イエス様のところに、青年が来たことがありました。「良い先生。永遠のいのちを受け継ぐためには、何をしたらよいでしょうか。」と尋ねました。イエス様は、「なぜ、わたしを『良い』と言うのですか。良い方は神おひとりのほか、だれもいません。」と言われるんですね。「良い」というのは、ヘブル語でトブ。神が天地を造られて、それを良しとみられたという時の「良い」です。良いものは、神にしかないということです。それで、イエス様は十戒の、人に対する戒めを教えられたら、「私は少年のころから、それらすべてを守ってきました。」と言いました。ものすごい模範生です！そこでイエス様は、彼を見つめ、いつくしんで言われました。「あなたに欠けていることが一つあります。帰って、あなたが持っている物をすべて売り払い、貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を持つことになります。そのうえで、わたしに従って来なさい。」こう言われたので、彼は悲しい顔

をして立ち去ってしまいました。この青年は金持ちだったのです。彼が金により頼んで、神を神としていなかったという、根源的な問題をイエス様は指摘されました。神を信じているようで、実は信じていなかった。それで、何も自分には良いものがないと悟ったのです。

ペテロが召された時が、興味深いです。彼は漁師でしたが、イエス様に舟を深みに漕ぎ出しなさい、と言われ、また網を下ろしなさいと命じられました。一晩中、漁をしてもとれなかったのですが、おことばですから、下ろしてみます、と言ったら、なんと舟が傾いて沈むかもしれないほどに大漁でした。そして、「これを見たシモン・ペテロは、イエスの足もとにひれ伏して言った。『主よ、私から離れてください。私は罪深い人間ですから。』(ルカ 5:8)」ペテロは、嘘をついたとか、怒りちらしたとか、何も罪らしいことを行っていませんでした。唯一、自分の職業である漁において、イエス様が完全に職業に対する誇りを粉々に砕いたということだけです。ここに、「義人はいない」という根源に近いところがあります。行為以上に、自分自身のうちに神を喜ばせることのできるような善がないという問題です。

## 2B 律法にある墮落

そういった視点から、本文を見てみましょう。パウロは、詩篇から引用して、いかにすべての人が罪の下にいるかを論じてきます。

### 1C 義の行い

「**義人はいない。一人もない。**」人間側においては、義はないという断言です。言い換えれば、神のみが義であるということです。聖書を読むと、そのことが自ずと見えてきます。アダムから始まります。あれだけ、神が良かったと呼ばれた天地において、神の置かれたエデンの園で、何不自由なく、自分の願うままに実を取って食べるのができたのに、よりによって、無数あったであろう木々の実から、食べてはいけないと神の言われた、たった一本の木からの実を取って食べたのです。そして、アダムの息子にカインとアベルがいましたが、カインの供え物が受け入れられず、アベルが受け入れられたので、彼は弟アベルを殺しました。ノアの時代になれば、ノアは神の前に正しいと言われました(創 7:1)。しかし、恵みによって信仰によってあくまでもそう呼ばれたのであり、洪水の後に、ノアは全裸で泥酔して眠っていたのです。

神の人、神のしもべと呼ばれる人々が、どれほど欠けがあったか知れません。アブラハム、イサク、ヤコブには欠けがありました。イスラエルの息子 12 人には人間模様がありました。ヨセフを兄たちが殺そうとしたのですから。モーセの時代もそうですし、モーセは怒って杖で岩を二度打ちました。ヨシュアも過ちがありました。士師の時代には、自分の目に正しいことを行って、めっちゃくちゃでした。そして、ダビデのことを思い出してください。彼は主に愛され、主の目に適った人でした。ところが、バテ・シェバと姦淫の罪を犯し、その夫ウリヤを殺すという大罪を犯しました。ソロモンは晩年に、多くの女を愛し、主への愛が全うされませんでした。主の恵みにあずかって、主に従

う人々を、神は起こされますが、その人たち自身に欠けがあったこと、失敗があったことを、聖書は包み隠さず証しています。

そして、福音書においてイエス様についてきた十二人の弟子のうち、一人が裏切り、残りの十一人はみなイエス様を見捨ててしまいました。ペテロはついてきたもの、途中で、知らないと言った三度も言って、イエス様を否みました。こうした人々が、教会の指導者として立てられるのです。義人はいない、一人もいないとは、言い方を変えると、神に立てられるのは、もっぱら恵みによってのみなのだ、ということです。

### 2C 霊的な悟り

次に「**悟る者はいない。**」と書いています。神の真理を悟っている人々は、だれもいませんでした。神から言葉を受け、啓示を受けていた預言者たちでさえ、神の御思いを悟らず、愚かなことを行ってしまっています。例えばモーセは、先ほど話したように、イスラエル人の不平に怒って、岩を二度、打ちましたが、主はイスラエルの子らに怒っておられなかったのです。

福音書では、ペテロが、「あなたは生ける神の御子キリストです。」と告白しましたが、それは天から与えられた啓示でしたが、イエス様が十字架の道に行くことを告げられると、イエス様を諷めました。「そんなことはあってはならない。」と。するとイエス様は「サタンよ、退け。」と言われたのです！なんとまあ、天からの啓示が与えられたのに、その直後にはサタンからのそそのかしにまんまと乗っかってしまいました。イエス様が復活された後も、心は鈍いままでした。何度となくご自分の復活を語っておられたのに、みな信じませんでした。よみがえられた後に、彼らの間に現れ、その心の鈍さを叱責されたほどです。主のみこころ、その御思いを悟っている人はいないということも、聖書から証しできます。

### 3C 求めない選択

「**神を求める者はいない。**」と次に書いています。これは、主を求めるか、それとも自分のことを求めるかの違いで、選択の問題です。主を求める聖徒たちは、聖書の中で多く出てきますが、しかし、同じ人々が、他のものを求めることがあります。

ユダのアサ王がその典型でした。彼は、「自分の神、主の目にかなう良いことを行った。」人であり、クシュからの百万の軍勢と三百台の戦車を前にして、「自分の神、主を呼び求めて言った。主よ、力の強い者を助けるのも、力の弱い者を助けるのも、あなたには変わりありません。」と言いました。それで、主はクシュ人を打たれ、彼らは逃げ去ったのです。ところがずっと後に、北イスラエルの王が攻めてこようとした時に、こともあろうに敵国アラムに、北イスラエルの王を攻撃するように頼みました。そこに、主のことばを告げる者、予見者が現れ、こう言いました。「Ⅱ歴代 16:9 **【主】**はその御目をもって全地を隅々まで見渡し、その心がご自分と全く一つになっている人々に

御力を現してくださるのです。あなたは、このことについて愚かなことをしました。これから、あなたには数々の戦いが起こるでしょう。」主と心を全く一つにしていれば、主は御力を現わすのに、あなたはそれをしなかった、愚かなことをしたと言いました。アサは晩年に、両足とも病気になりましたが、「16:12 その病気の中でさえ、彼は主を求めず、医者を求めた。」残念でなりません。

#### 4C 反抗

そして、「**すべての者が離れて行き**」と言っています。これは、主に背を向けること、反抗することですね。預言者イザヤが、ユダの民についてこう預言しました。「イザ 1:2-3 天よ、聞け。地も耳を傾けよ。【主】が語られるからだ。「子どもたちはわたしが育てて、大きくした。しかし、彼らはわたしに背いた。3 牛はその飼い主を、ろばは持ち主の飼葉桶を知っている。しかし、イスラエルは知らない。わたしの民は悟らない。」牛が飼い主を知っているのに、ろばは持ち主の飼葉おけを知っているのに、イスラエルは自分たちを育てた神から離れていると責めています。

#### 5C 無価値

そして最後は、「**だれもかれも無用の者となった。**」と言っています。善を行わず、悟らず、主を求めず、さらに反抗しているのですから、主にとっては無価値のもの、無用な者になってしまいます。自分の人生を台無しにしてしまうわけです。

そして、「**善を行う者はいない。だれ一人いない。**」と一度、しめくります。ですから、私たちは原点に帰る必要があります。私たちにできることは、このことを認めること。自分には良いものが何もないことを知ること。へりくだること。そして、主のみが、その義を、私たちの信仰によって与えることのできる方なのだ、ということです。

言い方を変えれば、このことを分らないと、なぜ、信仰によってのみ義と認められるのか、分らないということになります。信仰によって義と認められることが、何か安価な恵みのように見えるかもしれませんが、けれども、安価なんかではありません、ものすごい高価な犠牲が払われて、成り立っている恵みです。積極的に神を信じ、主イエスを信じる生活は、自分自身には何も良い物が無い、十字架に付けて、死んでいるとみなすことによるのみ成り立つのだということです。